

<四万十・黒尊の小さな宿 森のコテージ>

Aさん： 「森のコテージ」は平成18年8月18日に、もともとあった家を利用してオープンしました。「1日ひと組5名様までの小さな宿」というキャッチコピーでPRしました。PR方法として、始めは手作りのパンフレットをあちこちのお店などに置いていただきましたが、限界を感じ、ホームページを悪戦苦闘の末開設しました。アクセス数や予約が徐々に増えていく中で、ホームページの威力というものを痛切に実感しました。

開業から丸4年が過ぎ、利用者数は年々増加傾向で、開業1年目は322名。昨年は499名でした。リピート率は、組数で計算すると、2年目は10%、3年目は23%、昨年は32%で、連泊数は平均2.3日です。今年の夏休みの予約は既に満室の状態、そのリピート率は90%となっています。

地域別のランキングでは、1位高知県、2位大阪府、3位東京都となっています。お料理の提供が可能になったのは19年からで、それまでは、農家レストラン「しゃえんじり」様のご協力をいただき、ケータリング方式でやっていました。

「森のコテージ」で、有料体験というメニューは、あえて販売はしておらず、その理由のひとつとして、私どもは「森のコテージ」で過ごしていただくことが体験であると考えているからです。もうひとつの理由は、近隣に体験施設がたくさんありますので、そちらのほうにご案内ができるからです。

それから、私どもの地域では、地域活性化を目的とした4つの団体がございます。1つ目に、「しまんと黒尊むら」というのがあります。四万十川の支流の中で最も透明度の高い黒尊川が流れており、平成の名水百選にも選定されております。その源流には、足摺宇和海国立公園に指定されているブナの原生林、国有林があります。そんな中、地域の活性化や自然との共生を考える住民組織「しまんと黒尊むら」ができており、地域住民の意識啓発の事業が進んでおります。

2つ目に、口屋内地域では、地域のおばちゃん達の農家レストラン「しゃえんじり」ができ、たくさんのお客様が来ています。また、民宿へのケータリングでもご協力いただいております、なくてはならない存在となっております。

3つ目に、奥屋内下地域には25戸の家があって、その地域の集会施設を利用した宿泊施設「清いろの里」というのができました。2つの五右衛門風呂も新設して、10名の宿泊が可能となっています。お料理担当は地域のお母さん達です。

4つ目に、「四万十くろそん宿街道」です。黒尊川流域には、「清いろの里」以外に、4軒の個人民宿があります。受け入れ人数がとても少ないため、定数以上の申し込みがあった場合は、協力し合う目的でチームをつくったものです。

私は、地域の団体と情報交換をしながら相互間の協力体制を、体制づくりをしていくことがとても重要ではないかと考えております。

今までやってきて課題としては、一番困るのが、お葬式の時です。1年も前から予約が入っていたりしますと、お客様を断ることができず、地域に対して不義理をしてしまうという心苦しいところがあります。

2番目に、自分が病気になった時のお客様のお料理について、3番目として、私どもでは柚子を栽培していますが、農繁期（8月、11月）と予約の集中期が重なることです。ちなみに、1年間を通してのお断り合計件数は、一昨年は300件、昨年は280件くらいありました。

それから、連泊時のお料理メニューについても、4～5泊のお客様の時には、（車で）往復2時間ぐらい仕入れにかかることもあるので、その時間的ロスをとっても課題として感じております。

今後の展開については、飽きられないホームページを作成しなければいけないなど考えています。今年はベースからリニューアルしたいという目標をもっています。

私の宿は、のんびりゆっくりできる宿ということを目標にしています。「何も無い田舎だけど、やはり心休まるね」とか、「あの味はやっぱり森コテに行かないと味わえないよね」と言われるような宿にしたいと考えています。

それから、黒尊川とか四万十川とか市町村のつながりで連帯感を強化して、県の方々の地域に密着したご指導とか、ホームページをつくるとか細かなご支援がいただけたらいいなと思います。

統一感のある地域づくりということで、それぞれの独自性を保ちながら地域全体の発展を目指し、「高知の桃源郷」とよばれたいと思っています。

都会の多くの方は、田舎が大好きで、「遠いとか道が狭いとかは、大きな問題ではない」と、毎年東京から車で来ていただくご家族がいます。既に18回も宿泊していただいた大阪のお客様もいらっしゃいます。あるがままの生活をし、その生活の中にお客様をお迎えしている「森のコテージ」でございます。

私は、お客様から教わりました。田舎ということに自信と誇りを持つことを。たかが田舎、されど田舎だと思っております。

知事： たかが田舎、されど田舎ですよ。そう思います。

宿泊数やリピーター率も高く、平均宿泊数が2.3日とは驚きました。高知県全体の平均よりはるかに大きい。すごいと思いました。

お葬式とか病気になられた時は本当に大変ですね。こういう点からしても、くろそん宿街道の皆さんでお互い助け合ったりということをされていて、やはりネットワーク化というのは重要なんですね。

パンフレット方式からホームページへ切り替えたら反応はやはり大きいですか。

Aさん： もう全然違います。皆さんにお薦めしたいです。予約状況もホームページで確認できるようにしているので、キャンセルが入ったらすぐまた更新しています。
見慣れているお客様は、空いている日と言ってきてくださいますので、とても助かっています。

知事： ホームページ作りとかそういうような地域に密着した支援をというお話をしてみましたけど、よく考えてみたいと思います。

しまんと黒尊むらの皆さん、非常に活発に住民活動をやっておられますよね。皆さん方が、黒尊川という素晴らしい資源を生かして、もっと教育というか哲学的なところへも発展されて、いろんな取り組みを進めておられるんだろうと思います。具体的には、例えばどういうところで連携してやっておられるんでしょうか。

Fさん： 黒尊むらの場合、流域の住民皆が黒尊むらの村人という位置付けになっていて、役員の中には、それぞれの地区の区長さんが入っておりますので、地域の状況というのはすみずみまでわかる状況の中にあります。

外に出て行くよりも、やはり地域に来てもらい、交流人口を増やすことによって地域を元気にしていこうという動きを自分たちでつくっていく中で、民宿の人達が活発に動いてくれていることがひとつの財産であり、私たちも「お昼はしゃえんじりに来てね」という感じで、ゆるやかに横につながりながら、黒尊川は私たちの大事な川なんだよというところをゆるがさないで取り組んでいます。

知事： 特にレストランをされていると、地元の食材を使って作られ、例えば、ケータリングをしたりといったかたちでの助け合いも行なわれたりされているのですか。

Fさん： はい。農家民宿を立ち上げたけど、どうしても食事は自分の所では作れないというところには、「しゃえんじり」からお弁当にして持って行くからということで、今もやっているところもあります。この前、「清いろの里」で会議という時に、たまたまお葬式が入って、「じゃあ、料理はうちでしょうか、会場はそっちで貸してね」といったつながれる関係ができていたところがあります。

知事： 3年前に伺った時に、いろんな商品を開発してやろうと取り組みをされているのをお聞きしましたが、それで外へいろいろ売ったりするようなことというのは、「山間屋」の皆さんがやっていらっしゃるのですよね？泊めて、レストランで食べてもらって、商品開発してと、流域一体となつての取り組みを進めておられて、本当素晴らしいと思います。

Gさん： 一緒になってやれるのが一番なんです、なれる部分となれない部分があって、なれる部分でのつながりを中間で担えたらと思い「山間屋」をやっています。外販部隊というものをつくって、西土佐地域のものを（愛媛県）松山市に持って行って売ったりしています。

黒尊川流域の天然の山茶が、今、すごい人気が出ていて、今年はその山茶を集中して摘んでくれないかと、地域の人をお願いしているところです。それをまた体験メニューにできないかと地域の人と話し合い、地域の製品にしていけないかなと思っています。そういう部分の担い手というか、それが四万十の山間屋かなと自分で思っています。

Fさん： かつて、「国民休暇県 高知」という高知県のキャッチフレーズが、皆さん「働け働けで中流になりましょう」という時代の時に「休みましょう」というのはあまり好きじゃなかったんですが、今思えば、それってものすごく大事なことだし、それを言った当時の知事さんはここまで見据えていたのかなと、思います。

Aさんから、高知の桃源郷という言葉が出たんですが、やはり、その地域その地域の大事なものというので、ゆっくり休んでくださいというのが、グリーンツーリズムの大事なところだと思うんです。

そういう思いで横につながっていったら、「森のコテージ」に泊まった人が、お昼は「しゃえんじり」で食べて、次、どこかに行くという感じで、いつの間にか連携というのがとれていたり、あるいは、「いちょうの樹」さんから夜、「明日、お店開いてる？うちのお客さん、行くそうよ」という連絡をもらったり、そんなことがいつの間にかできているのがこの連絡会のいいところで、自分たちで結果的にパッケージになっているような取り組みができたらいと思っています。

知事： 国民休暇県構想は（前々知事の）中内知事の時に作り、「国民休暇県 高知」は今の十河副知事が考えたそうです。残念ながら、その後、観光政策としてそのまま継承していくというかたちになっていなかったところもありましたが、「土佐二十四万石博」あたりから、そのあと、「花・人・土佐であい博」、さらには、「土佐・龍馬であい博」、そして今度、「志国高知 龍馬ふるさと博」ということになりましたが、観光振興というものを高知県の産業の柱のひとつにして、腹をくくってそこに進めていこうとしているところです。さらに、龍馬であい博を実際にやってみて、これがどれだけ経済効果をもたらすか。高知県は観光でいけるじゃないかと非常に自信も持たせてもらったようなところもあると思っています。

ただ、いろんなブームがあろうがなかろうが関係なく、高知県の強みとしてやっていけるものとして、やはりこの滞在型・体験型観光、特に農家民泊とか、皆さん

がやられている観光があるんだろうと思います。